

**立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）**  
**プロジェクト研究（自由プロジェクト研究）**  
**2013年度研究【経過・成果】報告書**

研究代表者	所属・職名	氏名		
	文学部・教授	前田良三 印		
研究課題	「ドイツ民族主義宗教運動」の学際的ならびに国際的研究基盤の構築			
研究組織	所属機関・部局・職名	氏名		
	立教大学・文学部・教授	前田良三		
	立教大学・文学部・教授	久保田浩		
	一橋大学・社会学研究科・教授	深澤英隆		
	立教大学・文学部・准教授	小澤実		
	新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授	吉田治代		
研究期間	2012年度	～	2013年度	
研究経費	2012年度	2013年度	総計	
	3,000千円	2,990千円	5,990千円	
	3,000千円	2,990千円	5,990千円	

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

19世紀後半から20世紀初頭に起こった「ドイツ民族主義宗教運動」は、社会全体の急激な近代化に対する文化保守主義の反応の一つとして、たんに宗教の内部にとどまらず、社会や文化の広い範囲にインパクトを及ぼした現象であり、その研究は、ドイツあるいはヨーロッパを超えて、日本をはじめとする東アジアの近代化を考察するためにも大きな意味をもつ。本プロジェクトでは、宗教学、独文学、思想史、歴史学の専門家の学際的共同研究により、「ドイツ民族主義宗教運動」を、その宗教史的、思想史的、文化史的背景に遡って分析するとともに、同時代の社会文化的状況との関連において、多角的かつ総合的に考察する。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 文化保守主義 ] [ 東アジアの近代化 ] [ 学際的総合研究 ]

## 研究【経過・成果】の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本プロジェクトが研究の柱として当初設定したのは以下の4つの課題である。

- (1) 国際的次元での研究者のネットワークの充実 (国際シンポジウム・ワークショップの立案・実施、小規模な研究者の相互交流の場の充実等)、
- (2) 国内での学際的ネットワークの充実 (定期的な研究会の立案・実施等)
- (3) 平成 21 年度以降の科研費による研究において新たな課題として明らかになった諸現象に関する資料調査とその分析、
- (4) 近年刊行・編纂された「フェルキッシュ」関係諸史資料の検討、新たな史料調査・蒐集。

本年度は、昨年度の研究成果を踏まえ、基本的には規模を縮小してこれらの課題に継続的に取り組むとともに、年度最後の四半期はプロジェクトの成果をさらに次の共同研究へと繋げるための具体的な個別研究テーマの検討を行った。

(1) 2011 年、2012 年に開催された立教・テュービンゲン国際シンポジウムの継続として、2013 年 6 月 27 日に研究分担者久保田がテュービンゲン大学研究プロジェクトによるシンポジウム「聖なるテキスト。文学の宗教化と宗教の文学化 (Heilige Texte. Sakralisierung der Literatur und Literalisierung der Religion)」の枠内で行われた公開講演会に参加した。また同大学の研究者 (クラウス・アントーニ教授、ビルギット・ヴァイル教授等) と日独の近代化の過程における宗教的保守主義・民族主義的宗教運動、文化保守主義言説の社会的内的位置に関する共同研究の可能性について意見を交換し、これまでの共同研究の展開の可能性を具体的に検討し、さらにフランクフルト大学の研究者 (リゼット・ゲーブハルト教授、ミヒャエル・キンスキー教授、クリスティアン・ヴィーゼ教授等) と、ドイツの民族主義的宗教運動と日本近代宗教史における文化保守主義言説・運動との比較研究のための共同研究の可能性について意見を交換し (2013 年 4 月、6 月、9 月)、その具体化を探った。研究代表者の前田は、2013 年 5 月ポーランド、クラクフ大学におけるポーランド独文学会国際シンポジウムに参加し、ワルシャワ大学の研究者 (フランシジク・グルーシャ教授等) とドイツ・東欧における民族宗教運動の歴史的研究の現状について情報交換と討議を行い、本プロジェクト研究の対象の歴史的・地理的の拡大の可能性を検討した。また、テュービンゲンにおける研究分担者久保田の上記の打ち合わせを受けて、9 月にはテュービンゲン大学総長の立教大学公式訪問団のメンバーとして来日した同大学日本学科ロベルト・ホレス教授と前田が今後の共同研究のメンバー、研究協力者について具体的に意見を交換した。10 月末には前田がケルン大学附属高等研究所「モルフオマタ」およびボン大学ドイツ文学研究所のワークショップに参加、ケルン大学の研究者 (ギュンター・ブランベルガー教授、マルイティン・ルッセル博士等)、ボン大学の研究者 (ユルゲン・フォルマン総長等) と、文化保守主義における宗教と芸術の機能変換に関する研究協力の可能性について意見を交換した。研究分担者小澤は 2013 年 7 月立教大学において、ダレル・H・ラトキン博士 (スタンフォード大学) およびヒロ・ヒライ博士 (ナイメーヘン大学) による公開講演会「ヨーロッパ史のなかの占星術 中世・ルネサンスから近代へ」を立案・開催した。これらの意見交換を通じて、2014 年度以降本プロジェクトの発展的継続として計画されている共同研究の立案、ドイツ民族主義宗教運動とイタリアおよび東欧の文化・宗教運動とを比較・対照するための研究グループの構築の具体的なめどが立ったことは、大きな成果である。なお、2011 年・2012 年度に開催された立教・テュービンゲン国際シンポジウム「宗教的なるものと文化保守主義」の成果は、2014 年度中に日本語およびドイツ語の論集としての刊行をめざして目下準備中であることを付記する。

(2) 研究代表者・研究分担者全員が、それぞれの学問分野の枠組みを意図的に越境し、新たな学問性の構築を目指していることが本研究の大きな特徴であるが、そうした企図を実行に移し、また学際的視点からとりわけ「近代」理解の理論的枠組みを巡る活発な議論を生み出す方法として、当初予定していた定期的な小規模の研究会にかわり、研究分担者各自がそれぞれの研究分野においてすでに構築している学際的ネットワークの充実と活性化に努めた。研究代表者前田は 2014 年 3 月に京都で行われた国際フンボルト会議および新潟大学で行われた「アタナシウス・キルヒャー・シンポジウム」に参加し、哲学、日本思想史、宗教史、イタリア思想史、美術史の研究者と、「美的宗教と文化保守主義」にかかわるパネルを主催した。研究分担者深澤は 2013 年 9 月日本宗教学会第 72 回学術大会において、パネル「ファシズム期における古代理解」を組織した。さらに研究分担者吉田は文化保守主義に関する思想史と文学研究の学際的研究の実践として、2013 年 11 月富山市で開催された日本独文学会北陸支部研究発表会でグスタフ・ランダウアーの「ネイション」論についての発表を行った。研究代表者・分担者によるこれら個別の活動を踏まえて、2014 年 2 月 22 日立教大学において「ドイツ民族主義宗教運動研究会」を開催した。発表者と発表テーマは以下のとおり：青木良華 (東京大学大学院生、宗教学)「近代ドイツにおけるユダヤ人のアイデンティティをめぐる問題」、齋藤萌 (立教大学文学部学生、ドイツ文学)「カール・ラーションと絵画『冬至の生贄』—スウェーデン民族主義の諸相—」、長迫智子 (東京大学大学院生、宗教学)「フェルキッシュ思想の神秘主義的側面について」、丸山空大 (日本

**研究【経過・成果】の概要 つづき**

学術振興会特別研究員、宗教学)「エリアス・ヤーコブ事件と20世紀初頭のドイツ・ユダヤ人の自己理解」、Jeong Hwa Choi (ソウル国立大学講師、宗教史)「キリスト教的道徳の是非：フリードリヒ・ニーチェとマックス・シェラーのルサンチマンの議論にみる」(Für und wider die christliche Sittlichkeit im Ressentiment-Diskurs Friedrich Nietzsches und Max Schelers 独語)、福元圭太(九州大学比較文化社会学府教授、ドイツ文化)「モデルネにおける〈人間の刷新〉」。研究会は、若手研究者の最新の研究テーマについての発表の場としても企画され、また2年間のプロジェクトを総括する機会ともなった。

(3)(4) 一次資料・二次資料の調査・蒐集・分析に関しては、昨年度までに完了しなかった部分(「文化保守主義」関連二次文献)の調査・蒐集に主眼を置いた。研究代表者前田が2013年10月、ケルンおよびボンの大学図書館でボイロン修道院、マリア・ラーハ修道院などを拠点とする19世紀後半のドイツ・カトリックにおける刷新運動に関する基礎資料の調査・蒐集を、また2012年度後期から2013年度前期までフランクフルト大学を中心に海外研究に従事した研究分担者久保田が2013年度前期中に、キリスト教系の民族主義宗教運動(特に、反ユダヤ主義的世界陰謀論を思想的中心とするマティルデ・ルーデンドルフの運動)に関する一次資料並びに二次文献の蒐集と検討を集中的に行った(コブレンツ連邦文書館等)。昨年度から蒐集した資料のデータ・ベース化の作業は継続して行っている。これと平行する資料分析として、ドイツ民族主義宗教運動の美学的側面、ことにLudwig Fahrenkrogの一次資料の整理および読解(深澤)、近代においてフェルキッシュなルーン解釈に最も影響を与えたグイド・フォン・リスト『ルーンの秘密』(1908年)の翻訳ならびに解説、20世紀初頭の、ユダヤ青年らによる文化シオニズム運動におけるドイツ・フェルキッシュ思想の肯定的受容とグスタフ・ランダウアーの思想的立場の検討(吉田)を行った。さらに、上記(1)(2)でも述べた今後の共同研究の計画策定に必要な二次文献の調査と蒐集にも着手した。

なお本年度は、プロジェクトの成果の一部が研究代表者前田の単著書『可視性をめぐる闘争——戦間期ドイツの美的文化批判とメディア』(三元社、2013年11月)および研究分担者久保田浩の編著書『文化接触の想像力』(リトン、2013年)として公刊されたことを記して置きたい。研究成果は各研究分担者の論文、学会等における研究発表としても公にされており、今後も逐次論文・著書として公刊される予定である。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① - 前田良三 (単著論文)、Techno, Apokalypse, »Ikai«, Utopien und Dystopien in der visuellen Massenkultur Japans. In: Wilhelm Voßkamp, Günter Blumberger, Martin Roussel (Hg.): Möglichkeitendenken. Utopie und Dystopie in der Gegenwart, München: Wilhelm Fink, S. 223-258.
- 前田良三 (単著論文)、Symbolisch-Imaginär? Manga und die ‚kulturfigurative‘ Wirkung der japanischen Schrift. In: Ryosuke Ohashi und Martin Roussel (Hg.): Buchstaben der Welt. Welt der Buchstaben, München: Wilhelm Fink, S. 119-137.
- 久保田浩 (単著論文)「境域への眼差しとしての近代ドイツ宗教史—「キリスト教」「ユダヤ教」「ドイツ宗教」の隙間」、『ユダヤ教とキリスト教 日本基督教学会北海道支部公開シンポジウム記録』第2号、2013年、38-66頁。
- 久保田浩 (単著論文)「ドイツ連邦共和国における「宗教学」の制度化を巡る諸問題」、『宗教学年報』、XXX (特別号)、2013年、139-158頁。
- 深澤英隆「ドイツ民族主義宗教運動という主題」市川裕編『世界の宗教といかに向き合うか』、聖公会出版、2014年、38-52頁。
- 小澤実 (単著論文)、「ゴート・ルネサンスとルーン学の成立 デンマークの事例」、ヒロ・ヒライ・小澤実編『知のマイクロコスモス 中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』、中央公論新社、2014年、69-97頁。
- 吉田治代 (単著論文)、Ernst Bloch und Japan. In: Bloch-Jahrbuch 2013. Hrsg. von Francesca Vidal (刊行準備中)
- ② - 前田良三 (単著書)、三元社、『可視性をめぐる闘争 戦間期ドイツの美的文化批判とメディア』、2013年、300頁+42頁。
- 久保田浩 (編著書)、リトン、『文化接触の創造力』、2013年、272頁 (久保田浩「<文化間>への視座」、1-14頁。久保田浩「「反ユダヤ主義」の誕生—アルトゥア・ディンターの小説における知の生産」、175-203頁)。
- ヒロ・ヒライ・小澤実 (共編著)、中央公論新社、『知のマイクロコスモス 中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』2014年、398頁。
- ③ - テュービンゲン大学研究プロジェクト Heilige Texte. Sakralisierung der Literatur und Literalisierung der Religion 主催公開講演会、2013年6月27日、テュービンゲン大学。
- 公開講演会「ヨーロッパ史のなかの古星術 中世・ルネサンスから近代へ」2013年7月26日、立教大学。
- ドイツ民族主義宗教運動研究会、2014年3月22日、立教大学。
- ④ - 深澤英隆 (学会発表)、「ドイツ民族主義宗教運動における神話表象」、日本宗教学会第72回学術大会2013年9月8日。
- 小澤実 (学会発表)、「10世紀末デンマーク王によるルーン石碑建立政策 スヴェン双髭王の事例」、第64回日本西洋史学会大会ポスターセッション準備研究会、2013年9月21日、立教大学および2013年10月20日、大阪大学豊中キャンパス。
- 小澤実 (学会発表)、「歴史的アプローチによるブリテン諸島のルーン碑文」、第29回日本中世英語英文学会大会シンポジウム「善きヴァイキングとの出会い：英語史・中世イングランド史における北欧人の役割」、2013年11月30日、愛知学院大学。
- 小澤実 (学会発表) “Were rune stones raised in Iceland? An attempt at historical interpretation”, Workshop "Old Icelandic texts in medieval Northern Europe", 25 November 2013, Rikkyo University, Tokyo.
- 小澤実 (学会発表)、「国際ワークショップ「Old Icelandic texts in Medieval Northern Europe」を終えて スカンディナヴィア中世研究の現在と未来」、バルト・スカンディナヴィア研究会例会、2013年12月21日、早稲田大学。
- 吉田治代 (学会発表)、1913年の「ネイション」論—グスタフ・ランダウアーの視座 (日本独文学会北陸支部研究発表会、2013年11月9日、パレプラン高志会館 (富山市))。